

研究論文

## 保育を学ぶ学生における保育に対する見方に保育実習が及ぼす影響

松山 郁夫\*

The influence on Recognition of Childcare of Students Learning Childcare in Childcare Training

Ikuo MATSUYAMA

【要約】保育を学ぶ学生における保育に対する見方に、保育実習の体験がどのように影響を及ぼしているのかを検討した研究が少ないため、本研究の目的は、保育を学ぶ学生における幼児への保育に対する見方に、保育実習体験が及ぼす影響を明らかにすることとした。保育を学ぶ学生を対象として、子供への保育に対する関心の度合いを問う、独自の 34 項目から成る質問を記載した質問紙調査票による調査を実施した。調査対象は、保育を学ぶ学生のうち、保育実習を体験している 2 年生 118 名と保育実習を体験していない 2 年生 83 名とした。調査対象に重なりはなかった。各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、両群間で各質問項目における平均値と標準偏差を使って t 検定を行った。有意差が認められなかった 18 項目は、保育の基本原則や保育のあり方等に関することが主な内容であった。保育の基本原則や保育のあり方に関する認識は、保育実習の経験が影響するのではなく、保育原理等による保育に対する基本的見方を学ぶ講義によって形成される。有意差が認められた 16 項目については、全て保育実習体験がある学生の方の平均値が高かった。保育実習を体験すると、子供の心身の健康に保育が重要な役割を果たしていることに気づく等が考察された。

【キーワード】保育を学ぶ学生、保育に対する見方、保育実習、子供の心身の健康

### I はじめに

2018 年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の 3 つの法令が同時に改訂された。幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園における保育のあり方が多様化し、保育の質の向上が求められる中、どうすれば、幼児期にふさわしい保育が展開できるか、そのために保育者は子供に対しどのような関わりを心がければよいのかが重要な検討事項となっている（井口, 2020）。

今回の改訂における環境領域では、子供の発達段階に合わせて身近な自然や季節の変化を扱った内容を取りあげて実践している保育者が多かった。動植物を扱うことで、幼いうちから生命尊重や食育につなげようと実践している。それに対して、地域の文化伝統に親しんだり情報や施設などに興味をもたせたりする実践は、子供達に十分理解させることが難しいと考える保育者が多く、他の内容と比較して実践が少なかった。特に「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」については、今回の教育要領等の改訂で新しく導入された内容であるため実践例が少ない（山崎・奥谷・吉

\*佐賀大学教育学部

田, 2020) と報告されている。

自由記述法で保育者になりたい理由を質問したところ、ほとんどの学生が「子供が好きだから」「先生や保育者だった親にあこがれたから」という理由があげられていた。また、ボランティアや職場体験によって、自ら望んで子供と触れる機会をもっていた。そのため、保育を学ぶ学生の特徴として、自分なりの保育者に対するイメージと保育者になるという意思を持っている(毛利, 2019)。保育を学ぶ学生は、保育実習の後半で、先に子供集団への対応が変化し、その後で個人への対応の変化が続く(大神, 2019)と言及されている。

これらのように、保育者養成機関では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3つの法令の同時改訂に伴って、保育のあり方や保育者がどのように保育を行うべきなのか、保育実習における学生の成長について考察されている。保育者を養成する際、保育実習において学ぶべきこと、習得すべき内容等について説明されているが、保育を学ぶ学生における保育に対する見方に保育実習がどのように影響を及ぼしているのかを論じた研究が少ない。

以上より、保育を学ぶ学生における子供への保育に対する見方に保育実習がどのような影響を及ぼしているのかを検討する必要がある。したがって、本研究の目的は、保育を学ぶ学生における保育に対する見方に保育実習の体験が及ぼす影響を明らかにすることである。

## II 方法

### 1. 調査対象と調査項目

本研究では、保育を学ぶ学生を対象として、子供への保育に対する関心の度合いを問う、独自の質問を記載した質問紙調査票による調査を実施した。

調査対象は、A 県 B 市 C 大学において保育士の取得を目指している大学生で、保育実習を体験している2年生118名、および保育実習を体験していない2年生83名からの質問紙調査票が回収され、分析対象とした。

調査項目については、回答者のプロフィールに関する学年・性別を付記した。

分析対象者のプロフィールについて、保育実習を体験している2年生118名については、男性4名(3.4%)、女性114名(96.6%)であった。保育実習を体験していない2年生83名については、男性3名(3.6%)、女性80名(96.4%)であった。

### 2. 調査期間と調査方法

調査期間は、保育実習を体験している2年生118名(以降、「保育実習体験群」と記述する)については2018年7月、保育実習を体験していない2年生83名(以降、「保育実習未体験群」と記述する)については2019年4月とした。なお、両群の被調査者は重なっていない。

調査方法は、C 大学において保育を学ぶ学生に本調査の目的を説明し、協力することを了承した学生に調査票を配布し、その場で回答してもらった。

倫理的配慮として、回答は個人を特定できないように数値化して集計すること、回答の協力は任意であること、回答への記入は無記名で行うこと等を説明し、同意を得られた学生のみに質問紙調査票を配布し、回答を依頼した。

### 3. 調査項目の作成手順

子供の健やかな成長や発達を目指して保育を行う際、どのようなことが重要なのかを、保育士5名に箇条書きで思いっただけ書いてもらうようにした。得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、34項目の質問項目を作成した。なお、保育においては、各対象の状況に応じてきめ細かい対応が不可欠である。そこで、回答に含まれている意味内容をなるべく細分化しながら質問項目の作成を行った。

子供への保育に対する関心の度合いを問う独自の34項目の質問項目における回答は、「まったく関心がない」(1点)、「あまり関心がない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度関心がある」(4点)、「かなり関心がある」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1~5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

### 4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、保育実習体験群と保育実習未体験群における、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。その後、両群間で各質問項目における平均値と標準偏差を使ってt検定を行った。統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

## Ⅲ 結果

子供への保育に対する関心の度合いを問う独自の質問項目に対する、保育実習体験群と保育実習未体験群における各質問項目の平均値・標準偏差、両群間のt値については、表1の通りであった。

保育実習体験群に対する質問項目の平均値の最小値は3.53(.893)で、「29. 乳幼児健康診査等地域保健活動について理解すること」、最大値は4.84(.433)で、「24. 子供の気持ちに寄り添うこと」であった。全34項目中、4項目が3点台(14.8%)、30項目(88.2%)が4点台であった。

保育実習未体験群に対する質問項目の平均値の最小値は3.31(.825)で、「29. 乳幼児健康診査等地域保健活動について理解すること」、最大値は4.75(.464)で、「24. 子供の気持ちに寄り添うこと」であった。全34項目中、7項目が3点台(20.6%)、27項目(79.4%)が4点台であった。

これらより、保育実習の体験の有無に関係なく、保育を学ぶ学生は子供への多岐に亘る保育に対して、広く関心を持っていることが示唆された。

34の質問項目のうち、有意差が認められなかった項目は18項目(52.9%)で、それらの項目を内容で分類すると次の4つに分類された。

「1. 子供の視点に立つこと」、「19. 子供におけるプライバシーを保護すること」、「22. 子供の最善の利益を尊重すること」、「31. 子供に対して偏見を持たずに接すること」、については子供への保育の基本原則、「3. 子供の表現活動を促すこと」、「5. 乳幼児期の発達を促すこと」、「7. 心身の発育・発達を促すこと」、「9. 子供の気持ちを受容すること」、「24. 子供の気持ちに寄り添うこと」については子供の健やかな成長・発達を目指す保育、「6. 児童虐待の概念について把握しておくこと」、「10. 保育に求められる衛生・安全管理をすること」、「11. 子供の疾病について理解すること」、「15. 保育に求められる緊急対応に備えること」、「25. 心身の発育・発達を促す保健活動を重視すること」、「32. 児童虐待に対して適切に対応すること」については子供の安全、「8. 保育におけるソーシャルワークについて理解すること」、「29. 乳幼児健康診査等地域保健活動について理解すること」、「30. 子育て支援事業等の児童福祉について理解すること」については、保育に関する福祉の知識や相談援助に関する内容を内容

としていた。

表1 保育に対する関心の度合いを問う各質問項目の平均値・標準偏差・t値

質問項目	保育実習体験群	保育実習未経験群	t値
1. 子供の視点に立つこと	4.73 (.446)	4.61 (.559)	1.548
2. 子供の健康を増進すること	4.42 (.575)	4.23 (.611)	2.204*
3. 子供の表現活動を促すこと	4.55 (.579)	4.40 (.748)	1.566
4. 子供への言葉遣いに配慮すること	4.63 (.624)	4.41 (.750)	2.167*
5. 乳幼児期の発達を促すこと	4.47 (.623)	4.39 (.746)	.919
6. 児童虐待の概念について把握しておくこと	4.56 (.532)	4.64 (.531)	1.040
7. 心身の発育・発達を促すこと	4.46 (.594)	4.30 (.711)	1.693 <sup>†</sup>
8. 保育におけるソーシャルワークについて理解すること	3.72 (.772)	3.69 (.840)	.293
9. 子供の気持ちを受容すること	4.77 (.442)	4.71 (.482)	.918
10. 保育に求められる衛生・安全管理をすること	4.60 (.587)	4.45 (.649)	1.775 <sup>†</sup>
11. 子供の疾病について理解すること	4.33 (.763)	4.30 (.711)	.276
12. 表現活動の質を高めること	4.26 (.733)	3.96 (.930)	2.545*
13. 保育の専門職としての職責を果たすこと	4.53 (.623)	4.27 (.734)	2.709**
14. 子供に誠実に関わること	4.71 (.525)	4.41 (.663)	3.459***
15. 保育に求められる緊急対応に備えること	4.64 (.550)	4.45 (.785)	1.900 <sup>†</sup>
16. 子供の気持ちを代弁すること	4.40 (.730)	4.07 (.793)	3.009**
17. 子育てをする親の気持ちに寄り添うように努めること	4.69 (.550)	4.36 (.774)	3.285**
18. 保育現場におけるチームワークを重視すること	4.58 (.575)	4.19 (.706)	4.327***
19. 子供におけるプライバシーを保護すること	4.34 (.707)	4.31 (.748)	.278
20. 子供の気持ちを引きつける働きかけをすること	4.73 (.501)	4.45 (.649)	3.337**
21. 子供に接する際のマナーに配慮すること	4.57 (.606)	4.29 (.672)	3.067**
22. 子供の最善の利益を尊重すること	4.29 (.764)	4.20 (.745)	.769
23. 教材を有効に活用できること	3.91 (.827)	3.58 (.939)	2.564*
24. 子供の気持ちに寄り添うこと	4.84 (.433)	4.75 (.464)	1.422
25. 心身の発育・発達を促す保健活動を重視すること	4.15 (.735)	3.98 (.826)	1.593
26. 子供の気持ちに共感するように努めること	4.74 (.479)	4.40 (.604)	4.268***
27. 親との信頼関係を築くこと	4.69 (.531)	4.48 (.687)	2.369*
28. 保育の専門性を高めること	4.62 (.612)	4.23 (.831)	3.634***
29. 乳幼児健康診査等地域保健活動について理解すること	3.53 (.893)	3.31 (.825)	1.779 <sup>†</sup>
30. 子育て支援事業等の児童福祉について理解すること	3.81 (.899)	3.63 (.907)	1.382
31. 子供に対して偏見を持たずに接すること	4.69 (.531)	4.55 (.630)	1.662 <sup>†</sup>
32. 児童虐待に対して適切に対応すること	4.66 (.537)	4.58 (.627)	1.013
33. 子供に努めて関わること	4.53 (.688)	4.28 (.738)	2.529*
34. 子育てに関する親の要望に対応すること	4.25 (.742)	3.92 (.900)	2.915**

※保育実習体験群：n=118 保育実習未経験群：n=83

つまり、保育実習体験群と保育実習未体験群の間で、有意差が認められなかった 18 項目は保育の基本原則や保育のあり方等に関することが主な内容であった。

34 の質問項目のうち有意差が認められたのは 16 項目 (47.1%) で、全て保育実習体験群の平均値が高かった。それらの項目を内容で分類すると次の 4 つに分類された。

「2. 子供の健康を増進すること」、「12. 表現活動の質を高めること」、「16. 子供の気持ちを代弁すること」については子供の心身の健康、「4. 子供への言葉遣いに配慮すること」、「14. 子供に誠実に関わること」、「20. 子供の気持ちを引きつける働きかけをすること」、「21. 子供に接する際のマナーに配慮すること」、「23. 教材を有効に活用できること」、「26. 子供の気持ちに共感するように努めること」、「33. 子供に努めて関わること」については子供への関わり、「13. 保育の専門職としての職責を果たすこと」、「18. 保育現場におけるチームワークを重視すること」、「28. 保育の専門性を高めること」については保育の専門性、「17. 子育てをする親の気持ちに寄り添うように努めること」、「27. 親との信頼関係を築くこと」、「34. 子育てに関する親の要望に対応すること」については子育て支援に関する内容であった。

#### IV 考 察

保育実習体験群と保育実習未体験群の間で有意差が認められなかった 18 項目は、保育の基本原則や保育のあり方等に関することが主な内容であった。保育所保育指針第 3 次改定を受けて出版されたテキスト「保育原理」より、「保育の原理」に関するキーワードを抽出し概念化を試みたところ、「個人の尊厳」「子どもの最善の利益の尊重」「発達の保障」「未来社会への貢献」「保育の姿勢」「保育の手段・方法」が抽出された (中谷, 2017)。また、保育原理では保育職をめざし、免許や資格を取得する学生らが保育の専門的知識・技術を身に付け保育者としての資質向上を図ることで、保育の質を高めるための講義である (田中・伊藤・岩治, 2018) とされている。このため、保育の基本原則や保育のあり方に関する認識は、保育実習の体験よりも、保育原理等による保育に対する基本的見方を学ぶ講義によって形成されたものと推察される。

保育実習体験群と保育実習未体験群の間で有意差が認められた 16 項目については、全て保育実習体験群の平均値が高かった。

子供の心の健康は、遊びを中心とした園での充実した生活を通して育まれるものであり、とりわけ、園における自然と関わる環境の構成と子供の居場所作りが重要である (西田, 2013)。幼児が生活を楽しみながら成長していくうえで、歌の活動が幼児の成長に与え、心身の成長を促す (山下・虫明, 2019)。また、幼児の生活の中に深くかかわっている走ることを利用して、運動不足や肥満改善、さらに、体力の維持・向上等を目指すことが幼児期の無理がなく、飽きない身体活動の継続につながる (井上・笠次・宮下・高木・横山, 2018) と論及されている。それ故、保育実習を体験すると、子供の心身の健康に保育が重要な役割を果たしていることに気づくのであろう。

保育実習全てを終了した 4 年生 68 人を対象とした子供への対応に関して、最初の実習時と比べてどのような部分が自分で成長したと思えるかの振り返りから、全実習の後半で先に子供集団への対応が変化 (成長) し、個人への対応の変化が続く。子供の反応をある程度事前に予想して準備できるようになり、その場での臨機応変な対応ができるようになっていく (大神, 2019) と報告されている。保育においては遊びのなかに教育的経験が数多く存在することを踏まえれば、その遊びを発展・継続させ、子供をより長く深くその遊びに熱中できるように関わっていくことが保育者には求められる (近藤, 2019)。ま

た、保育者は、発達に応じた関わりによって子供に肯定的なまなごしを向けられるようになり、子供の発達をさらに的確に捉えていこうとする意志が生まれる（西垣・西垣・橋村, 2018）と言及されている。

これらのことから、保育者保育実習を経験した学生は、保育の場において子供に対して具体的にどのような接すればよいのかを考えながら、子供が興味・関心を示す遊びを通して関わり、より各子供の発達に応じた働きかけを試みる体験をする。そのため、子供との関わりを重視するようになるものと考えられる。

保育士に対する質問紙調査の結果、「特別な配慮が必要な子供の理解と対応」と「子育て支援に関する事項の理解と対応」に専門性不足と自己評価する者が多い。また、勤務期間年以内の者は全ての専門性の項目に専門性不足と自己評価する者が多い。研修の必要性については回答者のほとんどが、全ての専門性の項目に研修が必要と自己評価していた。専門性は有していると考えている者でも、さらなる高度な知識・技能を求めて研修の必要性を感じている（古橋・池田・櫻井・伊勢, 2017）。つまり、保育の専門性に対する保育の現場における認識にはかなり高いものがある。保育者が保育の専門性を高める必要性を持っているため、保育実習を体験した学生は、保育の専門性を高めることの重要性を実感したものと窺える。

保育所保育指針は、平成 29 年の告示で 3 度目の改訂が行われ、これまでの「保護者支援」が「子育て支援」という名称に変更されている。保育者は保護者に対して価値ある存在として尊厳を念頭に置き、対等な関係に立ち、保護者との信頼関係の構築を図ることが重要である。保護者に対して受容・共感しながら子育ての悩みを丁寧に聴き、かつ事実に基づいた出来事を聴き出すように心がける。また、保護者が解決するヒントをもっていると考えて支援のプランを自己決定させることが問題の解決や軽減につながる（山田, 2020）と説明されている。核家族化や地域コミュニティの希薄化が進行し、家庭や地域の養育機能が低下しているため、保育士が保護者の相談に応じることが増えている。したがって、保育実習を体験した学生は、保育における子育て支援の重要性を認識しているものと判断される。

以上より、保育実習体験は、保育を学ぶ学生における子供の心身の健康、子供への接し方、保育の専門性、子育て支援に対する関心を高めるように作用しているものと推察される。

これまでの関連研究から、本研究結果の意味や意義について考察してきたが、今後の課題は、今回得られた知見を、保育者の養成教育においてどのように活用するのかを検討し、保育実習における実習生への具体的な指針や実習をする際の視点を明示することである。

## V 結 論

本研究では、保育を学ぶ学生における保育に対する見方に保育実習の体験が及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。独自に作成した子供への保育に対する関心の度合いを問う 34 項目の質問項目に回答をしてもらった保育実習体験群 118 名と保育実習未体験群 83 名の間で、有意差が認められなかった 18 項目は、保育の基本原則や保育のあり方等に関することが主な内容であった。考察されたことは次の通りである。①保育の基本原則や保育のあり方に関する認識は、保育実習の経験が影響するのではなく、保育原理等による保育に対する基本的見方を学ぶ講義によって形成される。②保育実習体験群と保育実習未体験群の間で有意差が認められた 16 項目については、全て保育実習体験がある学生の方の平均値が高かったため、保育実習を体験すると、子供の心身の健康に保育が重要な役割を果たしていることに気づく。③実習では子供が興味・関心を示す遊びを通して関わるため、より子供の発達に応じた働きかけを試みる体験になり、子供との関わりだけでなく、保育の専門性を高めることや子育て支援の

重要性を認識する。④保育実習の体験は、保育を学ぶ学生における子供の心身の健康、子供への接し方、保育の専門性、子育て支援に対する関心を高めるように作用する。

## 謝 辞

本研究に協力していただきました保育を学ぶ学生の皆様に、深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 古橋啓介・池田孝博・櫻井国芳・伊勢慎（2017）田川市における保育士の専門性と研修必要性に関する自己評価. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 26(1), 17-26.
- 井上邦子・笠次良爾・宮下俊也・高木祐介・横山真貴子（2018）教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成（1）－「健康」に関わる教育内容研究知見に依拠して－. 次世代教員養成センター研究紀要, (4), 229-237.
- 井口眞美（2020）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を 保育の質向上に活かすために. 実践女子大学生生活科学部紀要, (57), 19-36.
- 近藤広美（2019）保育の専門性と保育における主体の所在. 創価大学大学院紀要, (40), 97-116.
- 毛利泰剛（2019）保育実習経験による保育者観と子ども観の変化の検討：教員養成課程の学生との比較を通して. 福岡女学院大学紀要, 人間関係学部編, (20), 53-60.
- 中谷奈津子（2017）保育士養成テキスト「保育原理」における教授内容の分析(3)「保育の原理」の探求を視野に. 社会問題研究, 66(145), 27-38.
- 西田忠男（2013）現代の子どもの健康と保育の実践的課題. 島根大学教育臨床総合研究, 12, 77-89.
- 西垣直子・西垣吉之・橋村晴美（2018）幼児の発達に応じた身体表現活動を可能にする保育者への支援に関する研究－領域「健康」における子どもの育ちを読み取る視点を広げるために－. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究, 3(2), 1-10.
- 大神優子（2019）保育実習生の子どもの関わり－集団及び個人への対応の変化－. 和洋女子大学紀要, (60), 13-22.
- 田中卓也・伊藤恵里子・岩治まどか（2018）「保育原理」におけるシラバス分析とその検討. スポーツと人間 3(1), 49-55.
- 山崎宣次・奥谷佳子・吉田真弓(2020)幼稚園教育要領等の「内容」に関する保育者の意識. 山梨県立大学人間福祉学部紀要, (15), 59-67.
- 山下世史佳・虫明眞砂子（2019）幼児期の音楽表現活動における歌唱の役割. 岡山大学教師教育開発センター紀要, (9), 109-123.
- 山田修三（2020）保育者に求められる子育て支援論. 安田女子大学紀要, (48), 117-124.